

岡山・邑久光明園

# 「ハンセン病療養所」に住んでみる

看護師の鑑

編集委員 原田 勝広 (59)

私が泊まっている「かえで会館」。玄関の肖像画は誰だろうと不思議に思っていたが、謎が解けた。中野鹿尾さんという看護師の鑑だった。

邑久光明園の前身は1909年、大阪・神崎川河口の低地に開設された第三区連合府県立のハンセン病療養所、外島保養院である。話はここが室戸台風に襲われた34年9月にさかのぼる。兵庫県の理髪店を辞め入所したばかりの19歳の青年はその朝9時ごろ、青年団が吹く避難ラッパを聞いた。門が閉まっている。扉を押し倒して外へ出た。



「かえで会館」玄関に掛けられた和服姿の婦人の肖像画＝写真 半田裕久

## 災害救助で殉職、滅私の心

対岸の兵庫・尼崎へ抜けられる中島橋を目指す。津波のような高潮がどっと来た。青年は必死に電柱にしがみついた。

奈良県から5年前に入所した17歳の少女は足が悪く、転んだ。波が押し寄せてきた。松の木と電柱は人が鈴なり。少女は目の前にあった流木につかまった。

青年も少女も貨物船がこちらにやってくるのを見た。救助船ではなかった。船も潮に流され座礁したのであった。

この時、病人を背負い、手を引いて救助したのが看護師の中野さんだった。患者を堤防に引き揚げてはまた泥水の中へ戻る。二度、三度。周りの「あっ、

ベッドがプカプカ浮いて何人かが助かった。「死んだかと思ったら、生きとったか」。青年と少女は大人たちに肩をたたかれ、犠牲者は患者173人、職員と家族14人という惨事であった。社会運動家の賀川豊彦も激励に訪れ「何人かここに残れ。そうでないと療養所は再建でき

なくなってしまうぞ」と忠告した。生存者は全国の療養所に分散委託され、壊滅した外島保養院が光明園として再スタートするのは4年後。賀川の言葉通り場所は大阪からはるか遠い、岡山であった。

波に追われて人々は橋の方へ逃げた。療養所にとって橋は社会とつながる象徴的な存在である。園の歴史に詳しい「長老」の望月拓郎さん(82)を訪ねた。

「光明園も長い間、渡し船でしかつなげられていなかった。入所者の念願がかない、本土側との間に邑久長島大橋が架けられたのは88年になって」。島を隔てる瀬は狭い。それでも、隔離されているという壁を誰もが感じていた。「橋の渡り初めでは家族や友人の遺影を胸に橋を渡ったひとでも多かったですよ」

群馬県・草津の栗生薬泉園に仮住まいした後、光明園へ帰園した、かつての青年、芳山智雄さん(94)と少女、河合静子さん(92)は今、日に一度は訪ね合って昔話に花を咲かせる。中野さんは看護師仲間が、おはよう、とあいさつすると合掌して返すような人だった。看護師といえは当時は神様みたいなもの。そういう時代であっても本当にやさしい人だった」

〈ハンセン病政策〉政府は1907年、法律「癩(らい)予防ニ関スル件」公布、放浪の旅に出ている浮浪癩を救済するため療養所に収容、隔離した。31年には「癩予防法」成立、在宅患者を含め強制的に療養所へ入所させた。53年の「らい予防法」は96年まで存続し、不当な長期隔離により入所者の人権を侵害するとともにハンセン病への偏見、差別を助長した。

「危ない」との叫びもむなしく高い波に……。

やがて少女は流れて民家の屋根にひっかかった。水が引くと職員の呼ぶ声がある。土手へ走ると死体が転がっていた。青年も保養院に戻った。病舎の屋根を破って中に入ったら、わらの

なくなくなってしまっぞ」と忠告した。生存者は全国の療養所に分散委託され、壊滅した外島保養院が光明園として再スタートするのは4年後。賀川の言葉通り場所は大阪からはるか遠い、岡山であった。

波に追われて人々は橋の方へ逃げた。療養所にとって橋は社会とつながる象徴的な存在である。園の歴史に詳しい「長老」の望月拓郎さん(82)を訪ねた。

「光明園も長い間、渡し船でしかつなげられていなかった。入所者の念願がかない、本土側との間に邑久長島大橋が架けられたのは88年になって」。島を隔てる瀬は狭い。それでも、隔離されているという壁を誰もが感じていた。「橋の渡り初めでは家族や友人の遺影を胸に橋を渡ったひとでも多かったですよ」

群馬県・草津の栗生薬泉園に仮住まいした後、光明園へ帰園した、かつての青年、芳山智雄さん(94)と少女、河合静子さん(92)は今、日に一度は訪ね合って昔話に花を咲かせる。中野さんは看護師仲間が、おはよう、とあいさつすると合掌して返すような人だった。看護師といえは当時は神様みたいなもの。そういう時代であっても本当にやさしい人だった」